

本書によって初めて明かされる近現代史の舞台裏の数々！

本書の特色

- 1 本書は、倉富勇三郎が書き残した長大な日記のうち、一九一九年から一九三四年までの二六年分と、一九〇五年七月から翌年八月までの二年分を、読みやすく翻刻したものである。その分量の膨大さと文字解読の難解さで知られる日記が本書によって初めて通読可能となった。
- 2 宮内省高官・枢密院副議長・枢密院議長を歴任した倉富は、自分が見聞きした事実や情報を日記に克明に記していた。本書によって他では決して知ることのできない宮中・宮内省・枢密院の内部事情を知ることができる。
- 3 大正後期から昭和初期の宮中・宮内省と枢密院の研究の第一級史料であり、『原敬日記』に匹敵する近代日本史の最重要史料である。
- 4 昭和天皇から山県有朋、西園寺公望らの元老、伊東巳代治、清浦奎吾、平沼騏二郎ら宮内官僚から柳田国男、森鷗外など、キラ星のごとき登場人物たちの動向、また皇族の臣籍降下問題、宮中某重大事件、柳原白蓮事件など大正・昭和史をいろいろ数々の事件の詳細な裏面史が本書によって初めて明らかとなった。
- 5 皇族(東久邇宮家)、王族(李王世子家)、大名華族(有馬家)の家族問題・家政問題についても記述が豊富。
- 6 東京控訴院検事長時代の日記(一九〇五／〇六年)は、検察側からみた日比谷騒擾事件裁判の裏面がうかがわれた、現職検事長の執務日誌として前例をみないものである。よって大正・昭和期の日記とは別に、第九卷(最終卷)に収録した。
- 7 各巻毎に人名索引を付し、第九卷には第一巻から第九巻までの総人名索引を付した。

【第二回配本】

第一巻

大正八年(一九一九)・大正九年(一九二〇)

定価：本体二〇、〇〇〇円＋税

ISBN978-4-336-05301-5

二〇一〇年一月二十四日発売

以降、巻数順に二年毎に配本予定

【造本・体裁】

A5判(二一〇×二四八mm)・上製クロス装・貼函入

各巻平均九〇〇～一〇〇〇頁

本文組Ⅱ・ⅡQⅡ段組



国書刊行会

〒174-0056 東京都板橋区志村 1-13-15 Tel03-5970-7421 Fax03-5970-7427 URL:http://www.kokusho.co.jp E-mail:sales@kokusho.co.jp

日本近現代史研究の第一級史料、ついに刊行開始

# 倉富勇三郎日記

## 全九巻

倉富勇三郎日記研究会(編)

国書刊行会

帖合・書店印

国書刊行会『倉富勇三郎日記』[全九巻]を\_\_\_\_部申し込みます。

申込書

お名前 \_\_\_\_\_

ご住所 \_\_\_\_\_

お電話 \_\_\_\_\_

\*必要事項をご記入のうえ、書店へお渡しく下さい。



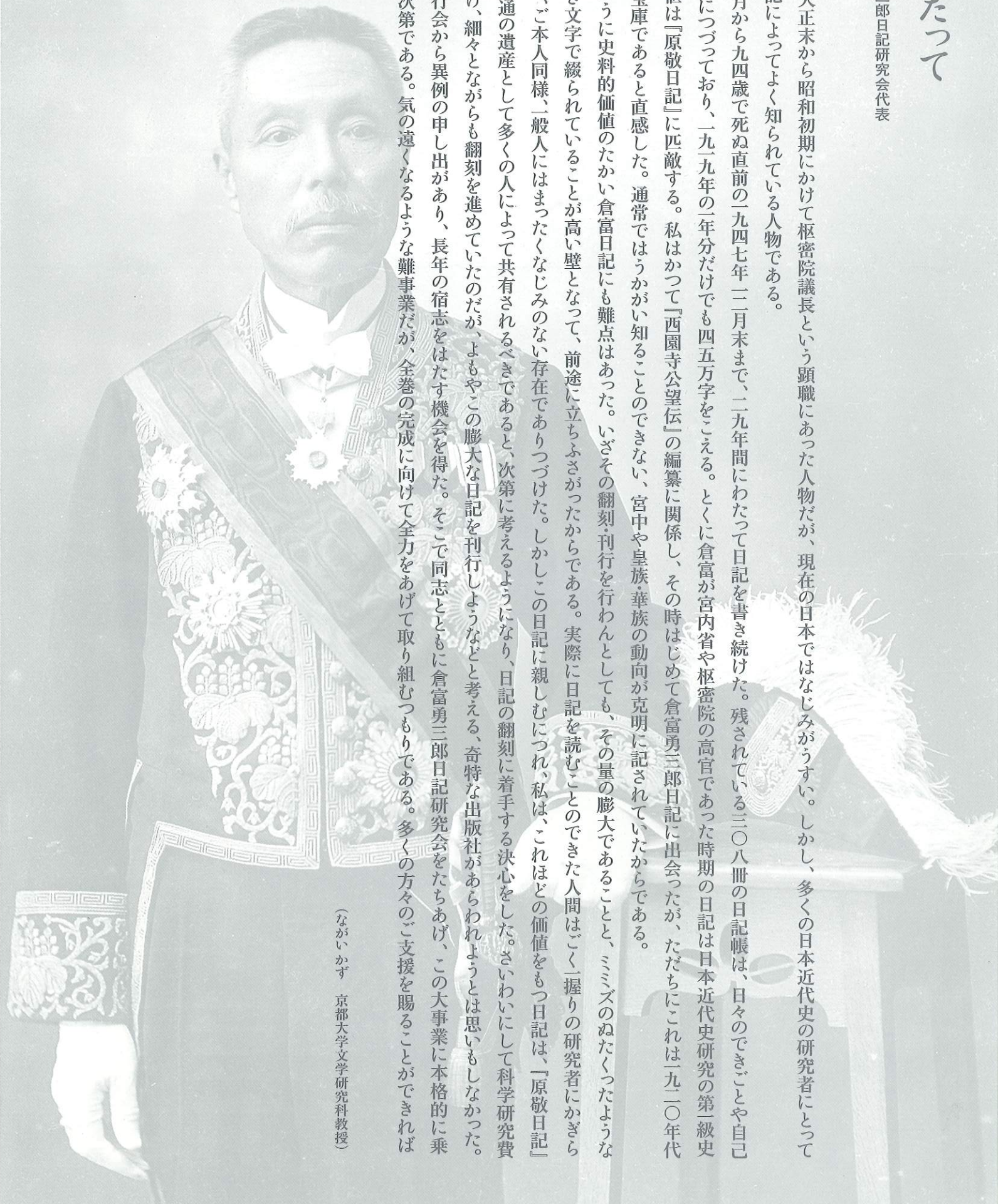
# 刊行にあたって

永井和 倉富勇三郎日記研究会代表

倉富勇三郎は、大正末から昭和初期にかけて枢密院議長という顯職にあった人物だが、現在の日本ではなじみがうすい。しかし、多くの日本近代史の研究者にとっては、その膨大な日記によってよく知られている人物である。

彼は、一九一九年一月から九四歳で死ぬ直前の一九四七年二月末まで、二九年間にわたって日記を書き続けた。残されている三〇八冊の日記帳は、日々のできごとや自己の見聞を詳細克明につづており、一九一九年の二年分だけでも四五万字をこえる。とくに倉富が宮内省や枢密院の高官であった時期の日記は日本近代史研究の第二級史料であり、その価値は『原敬日記』に匹敵する。私はかつて『西園寺公望伝』の編纂に関係し、その時はじめて倉富勇三郎日記に出会ったが、ただちにこれは一九二〇年代の宮中問題研究の宝庫であると直感した。通常ではうかがい知ることのできない、宮中や皇族、華族の動向が克明に記されていたからである。

とはいえ、このように史料的价值のたかい倉富日記にも難点はあった。いざその翻刻・刊行を行わんとしても、その量の膨大であることと、ミミズのぬたくったような判読しがたい手書き文字で綴られていることが高い壁となつて、前途に立ちふさがったからである。実際に日記を読むことのできた人間はごく握りの研究者にかぎられ、日記そのものも、ご本人同様、一般人にはまったくなじみのない存在でありつづけた。しかしこの日記に親しむにつれ、私は、これほどの価値をもつ日記は、『原敬日記』同様、われわれの共通の遺産として多くの人によって共有されるべきである、次第に考えるようになり、日記の翻刻に着手する決心をした。さいわいにして科学研究費補助金の支援をうけ、細々とながらも翻刻を進めていたのだが、よもやこの膨大な日記を刊行しようなどと考える、奇特な出版社があらわれようとは思ひもしなかった。ところが国書刊行会から異例の申し出があり、長年の宿志をはたす機会を得た。そこで同志とともに倉富勇三郎日記研究会をたちあげ、この大事業に本格的に乗り出すことにした次第である。気の遠くなるような難事業だが、全巻の完成に向けて全力をあげて取り組むつもりである。多くの方々のご支援を賜ることができれば幸いである。



(ながいかず 京都大学文学研究科教授)

## 近代史研究への大きな寄与

松尾尊兌

一九二〇年代から三〇年代にかけてのいわゆる政党政治期の研究には、原敬・牧野伸顕・松本剛吉・原田熊雄らの日記がよく使われる。その中にある倉富日記の特色は、異常なまでの詳細な日々の記述と、宮内省・枢密院といった未知の世界についての豊富な情報提供にある。とくに皇室関連については他の追従を許さない。

私の個人的経験では、京大滝川事件の折、滝川処分が美濃部達吉にまで及ぶことを見通しているのに一驚したおぼえがある。妻の実家の広津柳浪・和郎父子についての頻出する記述も、文学史家には見逃せまい。

まさに倉富日記を駆使して『青年君主昭和天皇と元老西園寺』を著した永井和氏を中心とする研究者たちが、「みみずのぬたくったよう」の形容がびたりの文字を読みこなし、適切な人名注までつけて日記公開にこぎつけたことは、日本近代史学界における近來の快挙である。刊行を引受けた国書刊行会にも敬意を表したい。

(まつおたかよし 京都大学名誉教授)



## 日本近現代史上最大の謎が明らかになる

佐野眞一



待望久しかったあの『倉富勇三郎日記』が、ついに刊行される。まことに慶賀に堪えない。これによって、日本近現代政治史中最大の謎とされてきたかなりの部分が明らかになるだろう。その意味で、これは歴史的出版物である。三年前、同じテキストを解説して『枢密院議長の日記』（講談社現代新書）という本を書いた者から言わせてもらえば、倉富勇三郎日記を読み解いて全九巻にまでまとめあげた京都大学・永井和教室の皆さんの努力にあらためて敬服する。

国立国会図書館・憲政資料室に蔵書されている倉富勇三郎日記を最初見たとき、目の前が真っ暗になって途方に暮れた。ペン書きの文字は、まさにミミズがのたくったようで、ほとんど判読不能だった。

解説には出版社のスタッフにも協力してもらい、宮中某重大事件が起きた大正十年と十二年を中心とした約三年分の日記をどうにか読み解けたのは、解説作業を始めて七年後だった。

その難読中の難読日記、しかも日本の近代政治史と近代天皇制を知る上で絶対に欠かせない一級史料が苦勞なく読めるというのだから、歴史好きの読書家にとってこれ以上の喜びはあろうはずがない。

(さのしんいち ノンフィクション作家)



